

特集 コミュニティの再生・創生と宗教

寺院環境の変容

—名古屋市—寺院の視点より—

渡辺観永¹

生活スタイルは、昭和、戦後、高度経済成長、バブルなどの様々なキーワードに表象される「近代化」の中で、大きなうねりに翻弄されながら変化していく。それは生活風景を変え、緩やかに心のあり方を変えてきたといえる。そのような環境の中で、ある仏教寺院が、どのような変化の波に翻弄されながら、あるときは抗い、あるときは流されながら、どのような活動をしてきているのかというスケッチである。

¹ わたなべかんえい：想念寺 代表役員／住職

私が住職を拝命しているお寺は、平成28年(2016)現在、人口226万人を有する名古屋市を中心部に立地し、慈弘山念寺という。

「街の寺」である。

門を出て、すぐに目に入るのは片側5車線の広い国道である。流通の大動脈であり夜間になっても車の走行はやむことをしらない。車の走る音から逃れるように周りを見渡すと、マンションなどのビルが並び、夕陽もよく見ることは出来ない。ただそのビル群の向こうに盛り上がった森の緑が、あせる心を穏やかにしてくれる。

右に見えるのは東海地方最大の前方後円墳である断夫山古墳であり、左に見えるのは三種の神器のひとつ、草薙神劍くさなぎのみつるぎを祀る熱田神宮である。

緑と白いコンクリートのモザイク模様の風景の中に、瓦の大屋根が見える。この周辺は、寺町でもある。同じ町内にも仏教の寺院が多いが、宗派は異なっている。大寺の周りに同じ宗派の塔頭寺院があるというのとは少し趣を異にしている。

地域の同級生に寺の子弟、寺族も少なくなく、またキリスト教の教会の子弟や神宮職員の子弟も友人におり、子供の気安さでそれぞれの施設内で遊んだり、ミサに参加したり神社の清掃奉仕の手伝いをしたりしていた。友人が見習い僧のかたちで通りを歩いていたとしても、おうやってるなあという感じで不思議ではなかった。それは言い換えれば、宗教的色彩が、都市の中にもかかわらず普通に溶け込んでいる風景だったといえる。

それが極めて稀な状況であるということを知るのは成人してからのことであった。そしてそのときにはすでに取り戻せない時代に足を踏み入れていたことを知った。

ざっとお寺の来歴を申し上げると以下の通りになる。

延宝6年(1678)創立。初め「東光寺」と称し現在地よりも1.5kmほど南の大瀬子町(東海道宮の渡し付近)に在った。元禄4年(1691)大瀬子町より今の地に移る。当時は熱田神宮の二の鳥居の東側に念寺が

在ったという。明和2年(1765)、心應想念大姉(佐久間某女)が田産を買添寄附したその功績を永く伝えるために、戒名より「想念寺」と改称した。佐久間某女が寄附をした頃には、寺は誰も寄るものがなく、荒れ果てていたということだ。それを復興したのである。これには異論もある。しかし昭和20年(1945)の名古屋大空襲で、被災してしまう。防空壕に本尊阿弥陀如来と過去帳一冊が担ぎ込まれたほかは、伽藍を含め一切を焼失した。そのために、由来なども過去帳の前書きに少し書かれているものしかなく、寺の正式なものはほとんど失われている。燃え上がる本堂を前に、大正時代に住職を拝命し、激動の戦前戦中戦後を通じ、昭和48年(1973)浄土に還られるまで住職を務められた第20代観廣上人はどれほど苦しみ、落胆しただろうか。

寺院の周辺の風景は、一夜にして変貌してしまった。名古屋城も燃え、熱田神宮の神秘的な森にも爆弾が落ち、社殿をはじめ多くが焼失した。昭和50年代、戦前を知るお檀家さんに、熱田神宮の森はもっと鬱蒼としていて昼でも薄暗くて神秘的だったよ、といわれたことを思い出す。戦前の寺の写真の一枚も残っておらず、戦前を知るすべは、生き残られたお檀家さんの肉声のみだった。その貴重な肉声をお聞きする機会を、お寺という現場で、年中行事での寄り合いで、法事という集まりの中で、私は幸運にも得ることが出来た。くすぶる煙と瓦礫の向こうに、きれいな夕陽が見えたそうである。落胆の淵に沈むことなく生き残った方々は再建の道に乗りだした。

だいたいどの寺院にも過去帳というものがある。そのお寺に関わった檀家の記録である。その家の歴史がわかるものである。想念寺にも過去帳はある。ただし明治元年(1868)からの記録だけだ。明治元年の記録からいきなり明治26年(1893)にとぶ。読み進めていくと、大正8年(1919)に観廣上人が住職を拝命した記録が出てくる。推測するに、住職拝命してから、それまでお寺にあった過去帳を体裁を整えて書き直したものであろう。明治以前の記録は残念ながらない。すべて焼失していると考えられる。

ときどき、過去帳に先祖が記載されていませんかと訪問される方がい

る。今でいう個人情報の塊なので、無碍に披瀝をすることはないが、調べたい項目をお聞きして、結果をお知らせする。適合しないことも多い。

様々な事情から戦前に名古屋を離れ、東京で家庭をなし、東京大空襲で大変な思いをしながらも、今日に至っている方が、自分の先祖を訪ねてこられたことがあった。情報は間違いなく出てきた。結果を聞いたその方は資料の写しの前で泣き崩れた。しかしそのあとのその方の親族の記録は過去帳には記載されていなかった。

名古屋大空襲である。

昭和20年6月の、その日を境に、それまで過去帳に連なっていた方々の生き様の記録がぶつと途絶えてしまっているのである。戦前と戦後という言い方を私たちは簡単にする。戦後に生まれた私たちは、そこに見えない壁を感じる。それは記憶の不連続性によるものが大きい。悲しみの記録が残るうちはいい。悲しみの記録さえ残らなかった場合、どうなっていくかを私たちは記憶するべきである。「かなしみのものがたり」さえないのだ。

昨今、「寺離れ」がいわれて久しい。

つい先日もNHKでの放送番組の中で、「墓じまい」をはじめとする様々なトレンドキーワードを選ばせる情報コーナーがあった。すなわち「寺離れ」を示唆する番組である。一方、僧侶をコメンテーターとしての、バラエティ番組が大いに人気を博しており、コメンテーターを引き受けている僧侶を講師として迎える講演会・説教会は大いに盛況となっている。

内容の深浅はここでは問わない。ただ興味を持つのは、現代日本において仏教はどのように受容されているのかという点ただ一つである。

おりしも、平成20年(2008)に発生したリーマンショックによって、信じてきた経済の右肩あがりがかじかれた。経費節減という動きが当然のものになった。その最たるものの一つが宗教行事だった。葬儀であ

る。葬儀不要論が一挙に噴出した。それは不合理なものの排斥運動にも似た動きであった。ターゲットとして既存の仏教がよく当てはめられているが、今までの寺院活動などを見ていると、「安心」の団体の外側にいる方々には不合理な内容が多いには違いなく、また結わえて紡いでいこうとする動きも、旧態依然とした流れを紡いでいるようにしか見られないものであった、と私も感じる。

「儀式は行うが、〇〇はいらない。」

これが葬儀不要論の具体的な行動として表れた。最初は華美な祭壇。続いて戒名(法名)、食事、参列者、過去の因習、近所や友人、親戚、僧侶と続いていき、ついには、〇〇の部分が、葬儀、儀式、いや人間そのものになろうとしていた。まさしく「断捨離」である。

愛する主人の遺言通りに何もしないお別れ式をしたのだが、これで本当にいいのかを考えたとき自分自身がおかしくなってしまう、と友人や親戚に抱きかかえられるようにお寺を訪ねてくる方も一方で出るようになった。そのかたわら、ネットを駆使した情報からDIY葬儀を指向する声も出てくるようになった。どちらも現代の葬儀を取り巻く実情であろう。

葬儀不要論は、このリーマンショック以前から当然ながらある。その興味深い事例として、伊丹十三映画監督の「大病人」をあげる。公開されたのは平成5年(1993)である。この作品は私に大きな衝撃を与えた。劇中、主人公の映画監督が、死をテーマにした映画を撮影するシーンがあり、カウンタータ般若心経ともいうべき僧侶と合唱団のコラボレーションの演出をしていたところで、導師役の俳優を監督の前に連れてきて、儀式にかぶる帽子がいるかいらないかで相談をする。その監督にとって、仏教は、葬儀というセレモニーの飾りでしかなく、セレモニーの演出は監督(施主)にあるということを示唆したのだ。死は自分のものだと大いに主張していた。しかしながら仏教のかたちは捨てることは出来ないという姿も示していた。これは仏教界に対する監督一流の会釈

であったかもしれない。

過度な豪華さや華美はもとより続くものではなく、形骸化したパフォーマンスはすたれていくのが当然である。しかし形骸化したものはぎ取られていけばいくほどに、本質があらわになっていく。その本質が皮肉なことに、「寺離れ」や葬式不要論から見えてくるものもすくなくない。

「終活」という言葉は、当初は、高齢者の親のためにどうするかという言葉であったが、現在では自分のためにどうするかという内容になっている。マスコミで喧伝される「孤独死」に恐怖し、自らが「断捨離」してきた広漠とした風景にたじろぎながら、自らの死を失敗しないための知識のコレクションの方向にシフトしている。バラエティ番組の内容は、まさに「終活」にとって望ましいものとなってきている。同時に知識を支えてきているものの価値にも改めて気づいていただければうれしかぎりである。

先代住職は文字通り、戦後復興の多くを担った世代となった。その苦労は端で見ていた私もいたいほど感じる。お寺で借財した金額も莫大なものだった。その時に多くの方に助けてもいただき、打算づくで近づいてくるものの恐ろしさも身をもって痛感した。しかしながら、寺院としての体裁は先代によって整えられ、現在に至っていることは感謝をしてもしきれない。戦災によって、失ったものは大きい。寺域も5分の1となり、本堂の大きさもかつてとは比較できない大きさだそう。しかしそれは生き残ったものがたりをしてくれた方々がいたからこそ、当時を知らない私が言えることである。過去帳のところでも申し上げたが、人のつながりが文字通り消滅してしまう恐ろしさは背筋が凍る。なくしてはならない記憶をつむぐものはなんであろうか。

平成7年(1995)年は、私にとって大きな転機となるものだった。

阪神淡路大震災とサリン事件である。

阪神淡路大震災の被害はまさしく驚天動地だった。どうしようと思っ

ていてもなにをしたらいいかわからない。西宮の大学に通っていらっ
 しゃったお檀家さんの息子さんが命からがら帰ってきて話を聞いても、
 どうしたらいいかがわからない。テレビを見てもどうしようどうしよう
 と思うばかりだった。同じ宗派の若手僧侶が集まったときに、神戸にボ
 ランティアに行っただろうかという話が出た。坊さんが行って何が出来る
 のかと尋ねたら、火葬場でお経をあげるんだ、多くの方がなにもない
 まま火葬される、そこでせめてものとお経をあげるんだ。なるほど、そ
 れはたしかに私たちでないと出来ない。行ってみよう。

しかし、つてを頼って赴いた私が案内されたのは、火葬場ではなく、
 小学校だった。

その小学校の掲示板は、文字通り壁新聞と化していた。ボランティア
 はとにかくなにか出来ないかと集まってきたという善意の集団だった。
 まず最初にした仕事は建物を取り壊して、瓦礫をよけるものだった。今
 の復興ボランティアでは考えられないことが目白押しだった。驚いたこ
 とは数知れず。とにかく初めてづくしでなにをしたら正解でなにをした
 ら失敗でなどはわからなかった。立ち止まることが一番危険だと感じて
 いた。今でこそ傾聴ボランティアという言葉もあるが、当時はそんなこ
 ともわからず、現場でどうしようどうしようの連続だった。ボランティ
 ア待機所の管理者をしていた女子大学生が過労で倒れた。状況の変化
 に、善意の想いだけではどうにもならないことを示した瞬間だった。腹
 がくくれたのはそれからだったかもしれない。防寒着の上から、衣を着
 て避難所の中を歩き始めた。嫌な顔もされた。でもあんた坊さんやった
 んか、と声をかけてくれる人もいた。わしな、あそこの寺の門徒やね
 ん、でもな、あそこの住職さんらがしたきいて、心配なんやけど……
 いろんな話が出てきた。その寺の前に行ってみると、塀がやはり掲示板
 になっていた。門徒さんが心配してます、との伝言を貼り付けると、翌
 日には寺族の方からの返事が出ていた。その旨、お伝えすると、ぼろぼ
 ろと笑いながら泣かれた。よかったわー！その顔を見て、無駄なこと
 でもはき出す瞬間が必要ではないかと閃き、教頭先生に許可をいただい
 て、夕方の短い時間、関心のある方で一緒にお参りしませんかと校内放

送で呼びかけてみた。教頭先生は、なかなかえらい方で、やってください、是非お願いします！といわれたが、その意味がすぐにわかった。壊れた位牌やご本尊、御掛け軸を持ってこられる方が何人もいるのだ。こんなになってしもうて、すみません、すみませんおもいながら避難所にいました。校庭で夕陽をあびながら、日蓮宗のお坊さんと一緒にお経を唱える。ありがとう、ありがとう、涙いっぱい流して、笑顔で帰って行かれたその姿を忘れられない。その姿は、お寺の活動なんてどうせ誰も何とも思ってやしないというニヒリズム的な思いをあっさりと打ち破ってくれるのには十分だった。僧侶でなくては出来ない活動があることを如実に教えられた瞬間だった。

またこの混乱の中で、活発に動いている組織、団体の姿にも驚かされた。それぞれの組織、団体に対してそれまで思っていたイメージが払拭させられたことは一度や二度ではない。苦しむ人を前にして、それぞれがもてる力をチームとして物事を遂行していくことの大事さを教わった。そこから始まった交流も少なくない。

百ヶ日法要を現地の仏教会がするから手伝わないかといわれて、二つ返事で参加することを決めた。わずかな間に、前は行けなかった駅まで乗り入れることが出来、日本の底力のものすごさを実感した。広い駐車場にテントが張っており、そこで、仏教会の方々による法要が営まれることになっていた。神戸以外からお手伝いにきた僧侶は思ったほど多くはなかったが、受付を手伝うことになった。テントの中の祭壇には、白木の位牌がずらりと並んでいた。この区で亡くなった方々の位牌を仏教会の方々の手分けして書いたのだそう。数の多さに改めて驚いた。会場に参集する方々は、お骨を持ってこられている方が少なくなかった。大小様々な骨箱。しかし息をのんだのは、骨箱ではない容器にお骨を入れて持ってこられた方をお迎えしたときだ。一人ではない。タッパーウェアにお骨を入れて持ってこられた方もいた。現代日本でどうしてこんな、と思ったが現実だった。

話が少し戻るが、3月に驚くべき事件が東京で起こっていた。サリン事件である。しかしながらテレビで映し出される緊迫した光景に現実感

がついてこなかった。逃亡者が出ていること、狙撃事件が起こったこと、様々なことが矢継ぎ早に起こり、否応もなく変化していく事態に戸惑うばかりだった。事件を起こしたのが宗教団体と目されていたこともあり、以前から不思議な団体だなと興味を持っていただけに、この推移に関心がいった。ちょうどその頃、私を神戸に誘ってくれた先輩僧侶が入っていたNGOが招聘したタイの僧侶を迎える準備をお手伝いしていたが、その僧侶が出国できなくなったと連絡が来た。日本で起こっていることはテロであり云々という説明があり、一連の流れを初めてテロとして受け止めることが出来た。講演会をする予定だった会場の門前で、雨の中訪れる方に突然中止になってしまったことをわびながら立ち続けた。その日は折しも、宗教団体の教祖が逮捕された日でもあった。

ある日、お寺に一人の訪問者が会った。その人は、私を名指しでやってきた。愛知県警の刑事課の方だった。「○○○○さんをご存じですよね」懐かしい名前が出た。それは忘れもしない。幼稚園からの幼なじみだ。小学校の高学年で引っ越していったが、幼稚園から小学校低学年までは彼と一緒に写っている写真ばかりだ。しかし、次に刑事さんがおっしゃった内容は耳を疑うものだった。彼が宗教団体に参加していたこと、サリン事件に関わっていたこと、そして現在も逃亡中であること。あなたが、幼なじみであるから、いつかここにもたずねてくるかもしれませんが。逃げているということは、自分がしてしまっていることをよくわかっているということです。もしたずねてきたら……謝る機会をつくってあげませんか？

程なくして、地元の新聞で、彼のことが連載記事となって掲載された。悔しかった。苦しんでいた彼の心が描かれていた。よく知っているご家族の思いも表されていた。その宗教団体を批判することはたやすい。しかし、その世界に救いを求め、救いがあったと感じた人がいたことも事実だ。

この時、日本の現実には終戦直後より誇れる姿だっただろうか。

焼け野原がなくなり、ビルも建ち、宗教施設や夕陽が見えなくなった風景の中で、強烈な怒りを感じた。記事を読んだ後、お寺を開放するこ

とを始めた。

最初に法話会を始めた。人が来なくてもかまわない。ポスターを貼って、なにかやってるなと思ってさえくれればいいとの思いから、あちらこちらに案内のポスターを貼った。朝の7時からお経をみんなであげて、そのあと法話を聞いて、食作法じきさほうを交えながらお粥いただいて解散というスケジュールだ。最盛期には60名近い人が集まった。この法話会は、今も続いている。つたないながらも話を続けた。無論、寺族をはじめ、多くのボランティアの方の協力がないと続かないものだ。お粥を炊くのは前日の夜に仕込み、当日の朝5時から炊き、炊きあがり後棒茶（ほうじ茶）で煮込む。6時すぎに門を開ける。最初に来るのは、お手伝いをかけて出ている方々だ。受付、食器の配膳、御抹茶の接待など、人が入れ替わりつつ、誰かが務めてくださっている。本堂で、浄土宗宗歌「月影」をピアノ演奏で皆で斉唱したあと、そのまま般若心経。ときどき、参加者の方の供養したい方の位牌や写真も須弥壇に飾られる。お越しになられる方の1割程度しか檀信徒がいないので、供養される方は時によって、宗派はおろか宗教さえちがう。お話も私や先代住職、他宗派や外国の留学僧、警察や議員、消防やガス会社、自衛隊や大学教授……さまざまな方にお話を伺った。講話の後は、座敷に移って、お粥をいただく。時代の流れで、最近は椅子席になり、またセルフサービス方式となった。しかし食作法をもって食事を始めるのは変わらない。

お粥をいただいたあとの数分の質疑応答、いや談話は、誠にすばらしい機会である。新しい情報や知識は文字通り咀嚼するのに時間がかかるのだ。知識によらない経験から来る質問は一同をはっとさせる瞬間がある。熱弁をふるうものの一方的な感情的な思い込みを感じさせるものは、質疑応答はまったくでない。

この20年、この法話会を皮切りに、様々な活動を企画あるいは実施し、あるいは受け入れを行ってきた。

お地蔵様をご供養するお参りの会「おじぞうさま」、篠笛やジャズ、クラシックなどの各種コンサート、使用済みローソクを使ったキャンドル作り、大人のぬりえ教室、フラダンス、着なくなった着物のリフォー

ムやりサイクルのための和裁、幼稚園などで使う小物をつくる洋裁、コスプレをつくる洋裁／工作、和太鼓、女性のためのヨガ、雅楽、お灸、カイロプラクティック、マッサージ、留学生に学ぶ料理教室、外国語講座、上方落語寄席、大学落研寄席、小学生を対象とした高校生主催サマーキャンプ、障害者による門前喫茶、市民菜園門前市、盆踊り、プラモデル講座、コスプレファッションショー、ウサギとふれあう会、介助犬とふれあう会、仏壇職人による伝統工芸講座、そして合唱。東日本大震災、ネパール大地震の際には、募金活動をかねてのイベントも多く行った。本堂に人が入りきらないほどの盛況もあったが、だれも集まらない惨憺たる状況もあった。

ニーズがなくなり終了したのものもあるが、とにかくやってみようと飛びついて、苦い思いが残ったものもある。楽しい場をとりあうように参加者同士がいがみあい、対立してしまったこともある。間に入ろうとしてこちらも傷だらけになることは少なくない。悲しいけれど、事態を収束するために集まりそのものを解散せざるを得ないこともあった。その結果、お寺に來れなくなった参加者のその後を人づてに聞いて愕然とすることもあった。非力さを呪うばかりだ。またお寺で行うということをとrendとばかりに、実施したいとお願いしてきて、貸しホールのようにふるまう方も少なからずいた。他の団体に貸したのだからうちにも貸すべきだといった大学生もいた。残念なことだが使用条件や規則も増えていくばかりだ。ただ最終的には人である。あいさつや笑顔で終わり、幾度もそのときの笑顔をおもい返すことが出来る集まりは素晴らしい。

特に子どもたちによる合唱隊は出来てから10年をこえ、老人保健施設などに定期的に演奏慰問をし、反響も少なくない。最初は、幼稚園児やその保護者から、近所の公園で遊んでもだれもいない。安心して遊ぶ場所がない、というところから、じゃあ本堂であそべば？ と気楽に始めたものだった。せっかくお寺にいるなら、歌の練習でもしよう、歌の練習をしたら親に聞いてもらおう、せっかくだから近所のデイサー

ビスにいこう！と、とんとん拍子に話が膨らみ、参加者も増え、参加児童は一時期30人になり、お伺いする老人保健施設も多いときは同じ日に何ヶ所も掛け持ちをするほどだった。集まった保護者の手弁当で始まった会だが、参加出来る保護者とそうでない保護者の間を取り持つために結構な苦勞があった。それでも続けているのは、子どもたちの笑顔と老人たちのうれし涙があるせいだ。しかしあるときから、参加児童がガタッと減り始めた。習い事や勉強が重なり始めたせいだとは間接的にきいていたが、残念なことだった。あるとき名古屋市植物園で歌う機会がやってきた。そのときはほとんどのメンバーがそろった。そしてそれを境に、老人保健施設への慰問が数人になってしまった。ある保護者が退会を申し入れにこられたとき、やめる理由がその老人保健施設慰問にあることを打ち明けられた。合唱は楽しい。子どもも喜んでいる。でも慰問はいやなんです。あの認知症や寝たきりの姿などを子どもに見せたくないんです……。中心で取り仕切ってきた庫裏はショックをうけてしまった。みんなが喜んでいると思っていたのは、錯覚だったのか、と。しかし、やりますよ！と言ってくくださる方も一方でいた。そのときの幼稚園児や小学生は、いまはもう大学生や高校生。今の子どもの合唱隊は、2歳の子から幼稚園、小学生を中心に、高校生やその友人たちによって継続している。いまでは、名古屋YMCAさんやロータリークラブ、音楽愛好家の方々とともに地域に笑顔をふりまいている。ただし、演奏希望のニーズに対して応えきれない一方、いつ終わってもいいように、あくまで有志のボランティアサークルとなっている。会費もいまだかず、必要経費はお寺から少しづつ援助している。得られる笑顔が大きく、宗教活動ではないが、精神的なケアをもたらすと同時に、活動している全員に与えてくれる「なにか」は大きい。

ただ、それぞれ全うしたり、継続したりしている活動や催しは、どれも求めている人があり、すくなくともその瞬間だけは笑顔を作ることが出来たと感じている。最初と最後にはともにお経をあげ、時間が許せる

限り同席し、求められれば話もする。相談を持ちかけられることも多い。人の出会いの場として、育成の場所としては目的を達成している。育成の目的は人間力だと感じている。決断をする孤独な瞬間が誰にでもある。そのときに基盤としてその決断を支えてくれるものをお寺の中で育むのだ。「お寺の中で」というのがミソである。いや、別にお寺でなくてもいい。教会でもモスクでも当然いい。夕陽あふれる雄大な自然のただ中でいい。様々な営みがある中で真摯な一瞬を感じられる場所だ。

つらかった言葉がある。

集まった人たちが、楽しんで過ごして、解散したあと、自らも満足感に酔いしれていたのに、後日参加した檀家さんに言われた言葉だ。「和尚さん、こないだは楽しかったありがとう。でもあそこにきてた人たち、本堂にあればいいのに結局最後まで誰も手を合わせなかったね」そのような情景に気がつかず、微笑んでいる檀家さんに返す言葉がなかった。

楽しむのはどこでも出来る。しかし、真摯な一瞬を感じられる場所はなかなか出会えないことを示唆してくださったのだ。それに対する返答をいつも心がけてお寺で様々な催しをしている。その中で、昨日開催した篠笛のコンサートはすばらしい学びの場所だった。演奏者は日本全国を回り、名古屋では想念寺で演奏される。もう8回目を数える。ただ、演奏する内容の割にどうしたわけか、参加者が伸び悩んでいた。今年の演奏会の打ち合わせで、初心者向けの講習会や演奏後のファンミーティングを提案した。するとやはり例年よりも多くの方が参加された。世代もぐっと若返った。すべての催しに共通することだが、出来るかぎり、私も最初に本堂でお経をあげ、終会には鐘を鳴らすことにしている。お寺を会場にする催しは昨今増えてきて、参加する方も慣れてきているが、それでも目の前で僧侶がいきなりお経をあげるのは戸惑うものだ。「まあせっかくお寺に来ましたからお経を聞いててくださいい……」などと申し上げ、合掌する。きょとんとしている方、はじかれたように合掌する方、無言で視線をそらす方、様々で本当に興味深い。お経をあげ終わって静かに鐘を鳴らす。ゆっくりと鐘の音が消え果てて、後ろを

振り返ると、じっと見つめる人がお経の前にくらべて多くなっているの
にいつも驚かされる。今回もやはり同様のことが起こった。そして20
名ほどのファンミーティングの際に、いろんな話題が出てきた中で、あ
る参加者が、「お経というものを初めて聞きました。最初、どうしたら
いいかわからなかったけど、和尚さんがふりかえったとき、自然に合掌
できました」とうれしそうに語ってくれた。「ああ、うれしいなあ。で
も私、合掌してくださいって言ってないよ。あなたの自然なところだよ
ね。」彼のびっくりした顔を見て、皆も同じことに気がついて驚いてい
た。人間力は、埋もれているところを掘り出すことだと感じている。私
を諭してくれた檀家さんに返答が出来たかと考えている。

観廣上人も、お寺に子どもたちを集め、歌を歌ったり、同様のことを
していた。幼い私には本堂や座敷でお稽古をしたりしているお兄さんや
お姉さんにかまってもらうのが楽しみであった。新しいことをしている
ように見えて、昔ながらのことをしているにすぎないかと苦笑してい
る。しかしそんな目新しくもない、普通のことをしなかった時期がお寺
にはあり、その時期に落とし穴のようにハマった人たちがいたというこ
とではないのであろうか。本当かどうかは知らないが、このようなこと
を言った僧侶がいるという話を聞いたことがある。悩みを抱えてお寺に
訪ねた方に、うちは生ものはあつかわないんだ、と。(亡くなった人、
葬式と供養しかしないとの意味)

私どももこの僧侶のことをわらうことはとてもできない。

結びにかえて——2011年3月11日

平成28年の夏、映画館はかなりの好況を呈している。「シン・ゴジ
ラ」と「君の名は。」がかなり好評だということだ。私の周りにも2度見
た、3度見るという声が少なくない。かたや怪獣特撮もの、かたやアニ
メの恋愛ものである。しかしその作品の筋立ては至ってシンプルである

ものの、見たものの心をゆさぶる。

そして既視感がある。

海外では「シン・ゴジラ」は興行としてなかなか苦戦しているという話も聞く。会議のシーンが多いなど、様々な要因は考えられる。

しかし最も大きな要因は、あの災厄を経験しているか否かによるのではないだろうか。

映画の中で、私たちは、主人公たちの視線を通じて、あの災厄をかたちを変えて再体験する。そして、飲み込まれてしまった苦しみも思い出す。わずかに5年の間に忘れてしまおうとしてしまっているものと、忘れては決していけないものすべてに気がつかさせられる。

昭和29年(1954)に公開された「ゴジラ」や同じ頃の「君の名は」の爆発的ヒットは伝説である。しかしその作品を平成の世に見ても、ものがたりの筋立てや見所は理解できても、ものがたりの裏側に流れるものは理解できない。それは時代の災厄体験が後のものには受け継がれていないからである。何をしても受け売りで、形ばかりのものになってしまうのである。

平成28年の両作品は、昭和の作品のリメイクではない。むしろ、平成の災厄をものがたりとして描くことで、昭和29年のあの時代の人たちが何をひきずって生きていたかを、示してくれるものとなった。

つくられたものがたりの中で、気がつかされるものはバラエティにとんだ知識ではない。もっと深いものであり、その深い大いなるものに結びつく智慧、そして「安心」なのだ。

このようなものがたりを見だし、つないでいくことこそが、今までの、そしてこれからも変わらぬ寺院の役割であるのかもしれない。

一般の「寺離れ」は残念ながらますます進むだろう。仏教を過去の知識や文化財としか見られない風潮も強くなるだろう。様々な変容する社会の中で、人の心は振り子のように翻弄され、自分がどちらを向いて動いているかも見えなくなる。一方で、寺という場所で連綿とした知恵に出会い、智慧をはぐくむ方も多く訪ねてくるであろう。

観廣上人から幼い私が聞いた多くのものがたりの中に、次のようなも

のがある。佐久間某女は亡き主人との思い出を記憶するためだけに、想念寺の阿弥陀さまを護持したと。

平成の災厄を経験したからこそ、わかるものが多い。この文章を書き連ねながら、名古屋大空襲を経験してもなおあきらめずに歩んできた先人たちの力強さを思う。

高邁な思想に裏付けられていない、平凡で愚直で、悲しみも喜びもすべて混ぜ合わせた、ささやかな記憶の断片が、未来の誰かを救うことを、痛感させられている。

寺はささやかながらも、問いかけがなされ、答えを模索し、その記憶を結ぶ場所、過去を想いとともにものがたる場所として存在してきたのだ。語られざる物語が多く積み重なって、にじみ出てくる「想い」。出来れば夕陽がきれいであることを集った人たちに指し示し、穏やかな色彩を街にあふれさせるようにしたいものである。